

Julio
1925

帝國學士院大多數賛成す	121
見よ此の實證(醫界ミエス語)	岡本好次	...	122
重大三國際會議	124
エスペラントの無電定時放送	125
若き同志婦人へ	森田松榮	...	127
新刊紹介	128
秋田雨雀『國境の夜』(對譯)	須々木要	...	130
めくら千人	伊藤徳之助	...	132
科學關: Mendelismo	丘英通	...	133
頑張り屋の錫の兵隊さん(註譯)	松崎克己	...	134
懸賞作文及び答案新課題	安黒才一郎	...	136
芥川龍之介『二つの手紙』(對譯)	梶弘和	...	138
内地普及だより	139
質疑應答	小坂狷二	...	141

Japania Esperanto-Instituto, TOKIO, Uŝigome, Ŝin'Ogaŝamaĉi III-14

Jara a'ono internacia ¥ 2.80 (7 svisaj Fr.); duonjara abono ¥ 1.40

„UYENO“ KOMERCA KOMPANIO

IMPORTO KAJ EKSPORTO

Marunouçi Building, Tokio Nipponlando

上野商事株式會社

東京市麴町區永樂町一丁目一番地
丸の内ビルヂング第八七九區
電話 牛込六五八四番

KJOKKÔ-SÂ

MAŠINO-FAKO. MEDIKAMENTO-FAKO

3-1, Hamamaçu-çò, Šiba-Ku Tokio

FREMDLIBRO-FAKO

N-ro 879, Marunouçi Building, Tokio

旭光社

機械部 藥品部

東京市芝區濱松町三の一番地
電話 芝八二一番・芝二〇一九番

丸の内出張所

洋書部

東京驛前丸の内ビルヂング八七九區
電・牛込六五八四番・振替東〇五二九〇二番

カ
タ
ロ
グ
送
呈

エ
ス
ペ
ラ
ン
ト
圖
書
新
荷
着



LA REVUO ORIENTA

LABORINTO DE TIU ĈI NUMERO: KENĜI OSSAKA.

IMPERIA AKADEMIO FAVORAS

Ĉe la lastjara kunveno de Internacia Unuiĝo de Akademioj usona delegito proponis la alprenon de helpa lingvo, sed post diskudado oni povis veni al nenia konkludo kaj prokrastis la decidon al la nunjara kunveno.

La Imperia Akademio de Japanujo ricevis la demandon pri tiu problemo de la sekretriario de la Unuiĝo, sed ĝi opinis, ke ĉar la afero ne estas pure scienca, ĝi ne estas kompetenta pri tio kaj decidis, ke ĝi ne faros ian oficialan decidon, sed ke ĝi simple kolektos voĉojn de la membroj kaj raportos la rezultaton pere de D-ro T. Fukuda, kiu veturos al la nunjara kunveno. Ĉe la ĝenerala kunveno de Marto oni petis opiniojn de la membroj, kaj rezultigis el 43 voĉoj

1^e: Ĉu estas dezirinde alpreni helpan lingvon? — jesis ĉiuj 43 voĉoj.

2^e: Kian lingvon alpreni? — 24 voĉoj por Esperanto 1 voĉo por Ido 18 voĉoj retenitaj.

D-ro Asaziro Oka, fama zoologo, nia malnova samideano, estis lastatempe elektita kiel akademiano. Ni do nun havas tri samideanojn ĉe la Akademio: D-roj Nakamura, barono Hozumi kaj Oka.

帝國學士院

[大多數エスペラントに賛成]

昨年開かれた學士院國際協會の會議に於て北米合衆國の會員から補助語を採用したがよいと云ふ提案があつたのであるが、色々議論が出て遂に何等決定を見るに至らず、本年度に開かれる會議まで該問題の決議は延期せられたのであつた。

日本の帝國學士院は學士院國際協會の事務局から本問題に對して諮問案を受け取つたのであるが、何分にも本問題は純粹な科學上の問題ではない故帝國學士院としては全く權限外の事柄であるとの意見で、從つて何等公式的な決議は之を行はず、單に出席會員の賛否の意見を徴して、其の結果を本年度の會議に出席せられる會員法學博士福田德三氏に就して會議で報告をして貰ふに止めることに決定せられるに至つた。そして去る三月十二日の帝國學士院月次總會に於て出席會員の賛否意見を徴したところ、その結果は四十五名で次の如くであつた

- 第一、補助語を採用することは必要あるか否かと云ふ事に對しては四十三名すべて必要と認む
- 第二、如何なる語を採用すべきか: エスペラント賛成二十四名 イード賛成一名保留十八名

我國に於て最も古きエスペランティストにして動物學の權威理學博士丘淺次郎先生は此の度帝國學士院會員に勅選せられました。これで帝國學士院には我が日本エスペラント學會の會員は中村精男博士、穗積陳重男(院長)及丘博士の三名となりました譯です。

VIDU LA FAKTON!

Gloro Sukceso en Japano Medicino

Ni informis en la aprila numero de tiu ĉi Revuo pri la vigla antaŭenpaŝo de Esperanto en la medicina sfero de Japanujo. Kaj denove kun granda ĝojo ni raportas pri la nova sukceso en la medicinrondo.

D-ro Tomosaburō Ogata, profesoro de patologio en Tokio Imperia Universitato, kiu jam antaŭlonge publikigis en Esperanto sian laboraĵon pri "kokosarkomo," nuntempe publikigis ĉi-subajn laborojn nur en Esperanto.

1. Pri la rizmalsano de birdoj. (2-a raporto). Precipe pri la rizmalsano kaŭzita per nutraĵo rilate manka je vitamino-B

2. Pri la kvanto de vitamino-B rezervita en organoj ĉe beribero kaj la komparo kun tiu ĉe malsano pro manko de vitamino-B (rizmalsano).

Tiuj ĉi du raportoj troviĝas en la 3-a kajero de la 32-a volumo de "*Mitteilungen aus der Medizinischen Fakultät der Kaiserlichen Universität zu Tokio*," kiu estas unu el la plej aŭtoritataj bultenoj en Japanujo kaj kiun atente legas tutmondaj medicinistoj.

Kaj la unua havas 130 paĝojn kaj la dua havas 40 paĝojn. Estas tute ampleksa raporto skribita en Esperanto! Oni ankoraŭ ne povas trovi tiel ampleksan kaj grandiozan literaturon de medicino en Esperantujo!

Tamen ne nur la amplekso sed ankaŭ la traktaĵo estas tre atentinda. Post la eltrovo de vitamino kelkaj

見よ此の實證

再び日本醫學界に於ける
赫々たる成功について

我々は本誌四月號に於いて我が邦醫學界に於ける エスペラント の目覺しい進展について報告したが今再び本號に 於いて醫學界に於ける 新しい 出事來を諸君にお知らせすることのできるのは 大きな 喜びである。

東京帝國大學 醫學部 病理學の教授たる醫學博士緒方知三郎先生は 諸君の 御承知の如く既に以前『雞の肉腫について』の業績をエスペラント で發表されたが つい最近再び下記の大研究報告を エスペラント でなされた。

1. 鳥の白米病について (第二報告)。特に比較的 ヴイタミン B 缺乏の食餌によつて惹起された白米病について。
2. 脚氣症に於ける内臓器關中に含蓄された ヴイタミン B の量について並びに ヴイタミン B の缺乏による症 (白米病) に於ける ヴイタミン B の量との比較について。

この二報告は『東京帝國大學醫學部紀要』の第三十二輯 第三冊に 載せられたものであるが 御承知の如く 同紀要は我が邦に於ける最も權威ある 業績報告書の一であり、全世界の醫學者達が大いに 注目し 且敬意をばらつてゐる所のものである。

第一のものは 百三十頁 第二のものは四十頁ある。エスペラント で書かれた報告書としては 實に 大部なものだ。未だ曾つてこんなに大部な 立派な 醫學文獻はエスペラント 界に於て見られなかつた。

しかも その大冊さ いふことのみでなくその論ずる内容に於ても 亦注目に 値するものである。實に ヴイタミン が發見されて以來數多の 醫學者達は 脚氣の病源は ヴイタミン B の缺乏であると 想定したのであつた。併し今や その假説は 疑はしいので日本の醫學者達は眞の 脚氣症の 原因探究のため大いに 努めてゐる。

緒方博士等は 上記報告書において ヴイタミン B の缺乏によつて惹きおこされる鳥の病氣——それを博士等は 白米病と呼んでゐる。

mdicinistoj supozis ke la kaŭzo de beribero estas la manko de vitamino-B. Sed nuntempe la hipotezo estas tre dubinda kaj japanaj medicinistoj klopodas eltrovi la veran kaŭzon de beribero.

En la supre nomitaj raportoj D-ro Ogata kaj aliaj traktas pri la malsano ĉe birdoj kaŭzita de la manko de vitamino-B, kiun ili nomas "rizmalsano," kaj per eksperimentoj ili mezuris la kvanton de vitamino-B rezervita en organoj ĉe beribero kaj ĉe rizmalsano kaj post la komparo de tiuj ĉi kvantoj ili trovis ke la rizmalsano kaj la beribero estas tute apartaj kaj ke la manko de vitamino-B ne estas la ĉefa kaŭzo de beribero. D-ro Sejho Niŝi, profesoro de anatomio de la sama universitato ankaŭ lastatempe en Esperanto publikigis sian laboron pri "la ĝenerala diferencigo de l'trunkomuskolaro." (2-a raporto).

La raporto troviĝas en la 1-a kajero de la 3-a volumo de "*Folia Anatomica Japonica*," monde fama bulteno de anatomiaj laboraĵoj, kaj ĝi traktas pri la diferencigo de l'trunkomuskolaro ĉe amfibioj, reptilioj kaj mamuloj.

Ni estas tre fieraj ke ni povas sciigi al tutmondaj samideanoj, precipe al medicinistoj, tiujn ĉi imitindajn klopodojn de niaj pioniroj.

*Glora la celo, sankta l'afero,
La venko—baldaŭ ĝi venos;
Levos la kapon ni kun fiero,
La mondo ĝoje nin benos.*

— Zamenhof —

Gazetoj estas petataj represitiun ĉi gravan artikolon!

— について論じ 實驗によつて 脚氣症と白米病との兩者における 臓器中に 保存された ヴイタミン B の量を測定し兩方の量を比較研究の後 白米病と脚氣症とは同一の症状でなく別々のものであつて ヴイタミン B の缺乏が決して 脚氣症の 主原因ではない ことを闡明したものである。

同大學醫學部 解剖學教授 醫學博士西成甫先生も亦最近エスペラントで『軀幹筋肉系の一般分化に就いての』研究を發表された(第二報告)。

同報告は『フォルヤ・アナトミカ・ヤポニカ』(解剖に關する 研究業績發表のものでこれ又世界的刊行物である)の第三輯第一冊に載せられたもので 兩棲類爬虫類哺乳類における軀幹筋の分化を論じたものである。

我々はこれら先人の 學ぶべき努力を全世界の同志 特に醫學者に告げ 得ることを大きな誇りとするものである。

赫々たる哉我目的神聖なる哉我任務
やがて勝利は來らん我等が頭上に
我等誇りもて頭をあぐる日
全世界全人類我等を祝福せん

—ザメンホフ—

—○—○—○—

此記事を新聞雜誌に轉載せられむことを望む。

~~~~~

エスペラント

## やさしい讀み物

松崎克己著。四六半截約八十頁。定價十五錢、郵税二錢。十部以上一割引。語學の習讀は『文法』では得られぬ、多くの『語法』を知るにある。本書は 興味ある 物語笑話等二十二篇を懇切丁寧に註解し 且つ 對譯を附した 初學必讀の同伴である。

~~~~~★~~~~~


エスペ란トの飛躍的進展

重大三國際會議

〔科學—商工〕

五月十四五、六日、パリに於てエスペラント普及上一新紀元を劃すべき重要な國際會議が二つ同時に開催せられた。一は

純正及び應用科學にエスペラントの使用に關する國際會議。

他は

商業及工業にエスペラントの使用に關する國際會議

である。第一日は晩ソルボンヌ大學大圓形講堂に於て兩會議の發會式を行ふ。世界的有名な醫化學者にして佛國科學々士院會員シヤールリシエー教授司會し科學々士院會員ダニエルベルテロト、無電の世界的權威者醫學博士ヒエルコレー氏、パリ商業會議所主計アンドレエボデー氏等の演説あり、テアトル、ド、ロベラ座のドムーザエオ夫人及びムラノ氏の音樂が花をそへた。

第二日の晩はパリエスペラント會の兩會議出席代表員招待會がある。第三日の晩には兩議會合同の祝賀會がパリ定期市(foiro)に於て催された。

科學會議の方はサンジャック街の海洋研究所(Instiluto Oceanografia)に開かれた。出席者はスペイン政府代表有名な技師 T. Guevedo, 飛行家 E. Herrera, ベルギーの元老院議員 Lafontaine, American Society of Mechanical Engineers, ロンドン Physical Society 代表等約百名出席。なほ佛國科學獎勵協會 Association Française pour l'Avancement des Sciences, 佛國土木工師協會 Association Générale des Ingénieurs des Travaux Publics des l'État 佛國工業獎勵協會 Société d'Encouragement à l'Industrie Nationale 其他知名の佛國學者が會議の後援者となつてゐる。

〔ラヂオ〕

四月十四日から十八日まで巴里に於て國際ラヂオフアン會議が開かれた。第一日火曜日は佛國ラヂオ俱樂部會頭 Ed. Belin 氏司會の下に巴里理科大學に開かれ、出席二

百五十名、約二十二箇國が代表された。討論演説は英佛語でなされ、英語への通譯は佛人 Leon 氏、佛語への通譯は某英人がやつたがあまりの迷譯に各本國人の物笑さなるのみならず屢々論點や用語不明のためつまらぬ議論に時を空費した。會議の主要問題は國際ラヂオフアン同盟の設立、フアン間の試験及び二途送信の國際組織、フアン及無線電信送信間の波長限定、呼び出し及び中間信號の改訂、國際補助語の採用であつた。各問題に對しては夫々特別委員會が催され、その結果が本會議で討論せられたのである。

國際補助語採用に關する特別委員會は四月十五日に開かれ Ed. Privat 博士が議長に P. K. Turner 氏及 Nordin 氏 (idisto) が副議長に、H. A. Epton 氏が幹事に選ばれ、十五國代表出席(一國一票)、先づ無線電話及び電信に國際語を必要するや否やが議せられたが、結局電話に就てのみ考へるこゝとし、電信には共用すべき言語のない場合之に準ずることに満場一致し、提議された英語、エスペラント、イード及インテルリングワに就ての討論があつた。スウェーデンの委員は本問題を専門家に諮問することとし二年後の次回會議まで延期することを主張したが、數氏は緊急重大であるとして延期に反對し十三票賛成、保留二票、反對無票で延期反對に決定。次で三人造國際語に就て長い討論あり、遂に十三票對一票(別に保留一票)でエスペラントを採用することに決定された。決議文は

『第一回國際ラヂオフアン大會は言語の相違に依て國際交通に惹起される不便を洞察し、國際無線電話通信及び送信、並に雜誌新聞及び諸會議の抄報又は翻譯に對する補助語としてエスペラントを研究し使用することを薦める』

なほ P. Corret 醫學博士の無線電信方面に對する附帶推薦提案は時間なきため翌日第二會合で討議されることになつた。十六日の第二會合にはなほ四ヶ國(日本も)参加あり、前日不參のアルゼンチン、日本及獨逸代表は前日の決議に賛成の旨を述べ、コレ博士提案の討論に入る。十二票對二票、保

留一票で次の決議を前記決議の第二項として追加することに決定。

『本推薦は國語を以て通信者が互に了解する術なき場合無線電信にも準用される』

次で副議長 Turner 氏は本會議が既用二國語と並んでエスペラントを補助語として採用し其の報告を公表し、早速エスペラント實用にさりかゝるべしと云ふ提案をなし、八對五票、保留一票で更に次の決議を第三項として追加決定：

『本決議に基き當會議はエスペラントを既用國語の外にその補助語として採用す』

一もみに特別委員會を通過せしめられたエスペラント案は十八日の本會議にかけられ、先づ委員長ブリグア博士は特別委員會の経過を佛英兩語で報告し一般討論に入るや、スケーデン代表ノルデイン氏(イデイスト)は英語で委員會に於けると同様の延期説をくりかへしエスペラントをけなしイードの優れるを説き、De Guesent 氏之を佛語に通譯す。コレ博士は之に對して American Radio Relay League が去年八月になしたエスペラント採用の決議を紹介し、エスペラント及イードの改良と稱する新國際語二十の名を讀みあげ、此等はまた互同志夫々の改良であるを唱へてゐるをすつばぬいたのには一同大に面白がつた。

他のスケーデンの代表は英語採用を主張し自國のフアンは皆英語を知つてゐる故エスペラントもイードもいらぬと、むしろ前記同國代表さからあふ主張をした。

更に議論がついたが、オランダ代表イスプルユツケル氏はエスペラントで演説しブリグア博士之を佛英語に通譯す。次でライアン氏の英語賛成、グレンカムプ氏のエスペラント賛成演説あり、最後に我が外務事務官宇佐美珍彦氏は立つて流暢なるエスペラントを以て日本に於ては英語はむづかしい爲め決して一般には用ひられて居らぬ、エスペラントはやさしいから大にもてはやされて居るを喝破し、討論終結、投票の結果第一項は十二對二、第二項は十四對二、第三項は十二對五票で終に採決されてしまつた。

本決議採用は吾々から見れば當然の成り行きとは云へエスペラント普及促進にもた

らす好影響は偉大なものであらう。

エスペラント定時放送

〔其 一〕

目下エスペラントの定時ラジオ放送をしてゐるもの。〔 〕中は波長、メートル、及電力、キロワット。時刻は英國夏季時刻を示す。

◎丁抹。

Kopenhagen [775; 1] 水曜日 9.30 p.m. 三十分間。

◎佛國

Paris: Ecole Sup. des Postes (PTT) [458; ½] カール教授エスペラント講習、水曜、8 p.m.

Paris: Radio-Paris (SFR) [1750; 5] コレー博士エスペラント講習、日曜日、8.15 p.m.

◎獨逸

Berlin: Vox Haus [505; 1½] グルツク氏エスペラント講習、土曜 3.05 p.m.

Frankfurt-am-Main [470; 6] ウルバン氏エスペラント講習、金曜 7 p.m.

Koenigsburg [463; 1] ニツツ氏及シヤツタト氏エスペラント講義、水曜及土曜、7.30 p.m.

Koenigswusterhausen [1500; 5] エスペラントプログラマーモ; 日曜 12.10 p.m.

München [458; 1] ヨツホ氏エスペラント講義、水曜 5.30 p.m.

Munster [410, 2½] アドリアン嬢エスペラント講義、水曜 10 p.m.

Stuttgart [443; 1½] フォークト氏エスペラント講習、水曜日 7.30 p.m.

◎伊太利

Rome: 1 RO [425; 2½] エスペラント講習、月曜 9.15 p.m.

◎ロシヤ

Moskva 中央無電局 [450] エスペラント講習、金曜 7 p.m.

◎スペイン

Barcelona: EAJI [325; 0.6] ドメネック氏エスペラント講習、水曜 9 p.m.

ALVOKO AL JUNAJ SAMIDEANINOJ

[若き同志婦人へ]

Macue Morita

Estas ne tre malofte, ke mi aŭdas de samideaninoj en diversaj lokoj, ke ĉie troviĝas tiel malmulte da samideaninoj, kaj ili ne povas ĉe esti Esperantan kunsidon pro tio, ke ili povos apenaŭ trovi samideaninojn ĉeestantajn. Mi povas simpatii ilin diversence. Eĉ tia nejunulino, kiel mi, multe hezitis, antaŭ ol mi decideme iris al Esperanta kunsido, kie troviĝas neniu alia samideanino. Mi komencis eklerni Esperanton antaŭ kelke da jaroj, kaj nun havas pli ol dek samideaninojn, sed antaŭ nelonge sintrovis treege malmulte da samideaninoj. Oni facile povas diveni, kia estas stato de samideaninoj en aliaj lokoj.

Se foje juna samideanino aperos ĉe kunveno, ne nur ŝi ne estas ricevata samideane, sed kiel sur la unuan fremdlandanon aperantan en intermonta vilaĝeto, sur ŝin ofte oni ĵetas aŭ flankajn rigardojn, en kiuj troviĝas ĉiam scivolemo, ofte mokemo, sed tre malofte semideaneco, apenaŭ amikeco.

Nu, junaj samideaninoj, se vi nur sidas kaj atendas ĝis kiam samideaninoj aperos en via loko, vi perdos multe da valora tempo, kiu alie donos al vi bonan sperton kaj progreson. Kaj pri tio, mi ne povas ne admiri F-inom Jamaguĉi. Tiu juna geniulino tiel frue forlasis la teron eĉ antaŭ ol ni en Tokio konis ŝin kiel Esperantistinon. Ne mankas inter ni kleraj kaj inteligentaj

virinoj, kiuj fervore stndadas aŭ pro intereso aŭ pro gusto, sed ne estas multaj kiuj kiel ŝi sindoneme kaj senlace klopodas por la bono de siaj samseksanoj. Siajn penegan studadon kaj noblan karakteron forte atestas ŝiaj artikoloj kolektitaj de ŝia bona samideano S-ro Len, kaj ili ĉiam restos vivoplenaj instigante legantinojn al studado kaj klopodo por aliaj. Por instrui kaj propagandi Esperanton inter Formosanoj, ŝi tiel sindoneme laboradis sub la despota registaro plena de antaŭjuĝo kaj persektemo. Por perfektigi sian konon, ŝi ne forlasis studadon en malsanlito ĝis kiam morto vizitis ŝin.

Kiam ŝi studadis socialismon, oni diras, ŝi ne nur ne hezitis ĉeesti, sed eĉ faris lacionon eĉ samideana kunveno, kvankam ŝi estis unu el la plej junaj ĉeestantoj. Ĝis nun ŝiaj samideanoj paroladas pri ŝi kun amo por ŝia sincera amikeco kaj helpema samideaneco, kaj kun respekto por ŝia klereco, sindomena laborado kaj nobla kuraĝo. Ŝia Esperantistina vivo estis tre mallonga, sed ŝia memoro eterne vivos en la koro de la samideaninoj, kiuj sekvas ŝin en la sama spirito por nia "sankta afero."

Alia fortimigaĵo por junaj kuraĝaj Esperantistinoj estas senkora kritiko de samscksanoj; eble tio ŝajnas bagatela, sed tute ne por la suferantino. Iu verkisto diris, ke al viro estas ofte pli tolereble, ke Dio trovu makulon en lia koro ol iu belulino trovu trueton ĉe lia vesto. Ŝajna bagatelaĵo do ne ĉiam estas bagatelaĵo.

Al tiuj suferantinoj pro malica

kritiko de samseksanoj mi kune kun simpatio prezentas tre bonan ekzemplon, kiu helpas ilin. Ŝi estas 20-jara Esperantistino, kiu laboras kiel presistino, kaj subtenas siajn maljunajn gepatrojn. Ŝi laboradas de frumatene ĝis vespere, kaj dimanĉo estas la unu sola tago kiam ŝi povas ĝui sian liberan tempon sub la hela suno. Preskaŭ ĉiuj ŝiaj kunlaboristinoj pasigas dimanĉon en loko de amuzaĵo kiel birdetoj liberigitaj el sia kaĝo, dume ŝi pasigas la tagon ĉeestante kunvenon aŭ laboristan, aŭ politikan, aŭ Esperantan. Multaj laboristinoj enskribis sian nomon kiel membroj de la Societo por gepresistoj, sed ŝi estas la sola ĉeestantino ĉe ĝia kunveno.

Ĉar ŝi ne pasigas sian dimanĉon ĉe restotracio aŭ kinematgrafejo kune kun siaj kunlaboristinoj, ŝi estas rigardata de ili, kiel fierulino aŭ nesocietemulino. Kompreneble ni ne povas riproĉi tiujn kompartindajn senkulturajn kaj prematajn laboristinojn; sed ĉu ŝi ne estas kuraĝa pionirino, kiu meritas nian admiron kaj respekton? Ĉu ni ne vidas ŝin sanganta inter dornarbetaĵo por kulturi vojon por altigo de laborpago, mallongigo de laborhoroj kaj emancipo kaj liberigo de la katenita klaso! En tiu granda presejo ŝi sola tiel bataladas, kaj kiam eĉ unu el siaj celoj por la bono de la laboristinoj efektivigos, tiam ricevantoj de tiu bonaĵo estos ĉiuj laboristinoj, kaj ŝia sindonema klopodo kaj moko suferita neniam aldonos al ŝi bonaĵon pli multe, ol al aliaj. Tiu, kiu havas internan konvinkon pri sia misio, kaj kiu estas fidela al sia principo povas esti tre modesta kaj pacienca

eĉ kiam oni nomas ŝin fiera, kaj povas ami samseksanojn kun trankvila simpatio eĉ kiam ili nomas ŝin nesocietema.

Nu, junaj amikinoj, kiel ajn junaj vi estas, kiel ajn nespertaj vi estas, via pura nobla karaktero kaj sincera amikeco certe povas forigi, en la daŭro de longa tempo, malkomprenigon, malicon, kaj malamikecon. Konsekvence, diferenco de sekso faros nenian baron, sed nur plena sento de kamaradeco regos ĉie, kie geesperantistoj kunsidas, kaj ĉiu samideana kunveno realigos miniaturon de "unu granda rondo familia." Se tiel fariĝos, iom post iom junaj samideaninoj plimultiĝos kaj la stranga nenormala stato de Japania Esperantujo, ke eĉ ne unu samideanina rondeto ekzistas kiu aktive propagandas dum cento da samideanaj rondoj prosperas, ne daŭros longe. Mi kuraĝas diri, ke al ĉiu samideanino prudento montros kiel distingi inter kunlerninda rondo kaj neinda.

Por ĉiu homo estas neeble eviti fari malbonon al sia propra karaktero, kiam li aliajn mokas kaj insultas. Estas tute neeble humiligi aliajn, ne humiligante sin mem unue. Estas tre dezirinde, ke en ĉiu loko, junaj samideaninoj, antaŭ ol plendi kaj ĝemi pri izolita stato, kun pacienco kaj kuraĝo kiel niaj du admirindaj samideaninoj, kaj gardataj de sia prudento, antaŭen marŝu por perfektigi sian konon de Esperanto, kaj aktive propagandadu inter samseksanoj. Bona kono de la lingvo akompanata de sindonema vivo jam estas mem elokventa propagandilo por samseksanoj eĉ sen publika agado. (daŭrigota sur p. 129)

BIBLIOGRAFIO

(新刊紹介)

◎PRO IŜTAR, originala romano de H. A. Luyken; 12.5×19 cm.; p. 204; prezo broŝurita 3 Gmk, bindita 4 Gmk; Ferdinand Hirt & Sohn, Leipzig; 1924.

エスペラント原作文藝、國際文學に就て吾人は屢々公衆の前に説いた。然し實の處、國語文學に對して遜色のないものを挙げよと云はれたら、いさゝか忸怩たらざるを得なかつた。Luyken 氏の Pro Iŝtar 出で、初めて國語文學に拮抗し得るエスペラント原作が生まれたと云へる。

Luyken 氏がその處女原作 Paŭlo Debenham (細字 227 頁) を著したのは既に十餘年前であつた、爾後 Mirinda Amo, Stranga Heredaĵo の大作を公にし、その度毎に構想に於ても文體に於ても一段の進境を示し、腕のさへを見せて來た。讀むに堪えぬ文體の譯書を平然と公刊するものある一方、Luyken 氏の如き シツカリ した文藝家のあるは嬉しい。本書は古代のバベルを中心とした歴史小説で同市に起つた異教、ここに月の女神にして戀の女神たる Iŝtar を信仰する偶像教の Jehova 教即ち一神教倒壞の陰謀を経とし、Betrah の徳行者にして學者たる Omar, 同市の妖麗な貴女 Zalmuna, 實は Iŝtar 女神の pastrino Zir-Nana, Omar の美しい且つけなげな婢 Adaha, 智者 Lemuel 等の諸人物を緯としたもので、Zalmuna は始めは Jehova-kulto 倒壞の目的で Omar を魅さうとしたが、それは眞の戀に變つた。Omar は kontaŭvole に妖女 Zalmuna にひきづられてゆく。Omar の友、老 Lemuel は姿をかへて Zalmuna の居城にしひ込んで彼女がバベルの偶像教首長等と交渉があり、Omar の信仰を覆すため妻子を殺した事を知りバベルに赴いた Omar の保護にゆく。Omar を戀する忠婢少女 Adaha は更に陰謀を聞いて主を思ふ一念獅子や山賊の出沒するアラビアの荒野を物ともせず救援に走る。バベルでは王と僧侶との間にわだかまる暗闘は Leumel に Zir-Nana の眞想を握られた事で krizo に達する。三高僧の間のみにくい

争闘で最高僧 Uzibitum は暗殺され、それはやがて知者老 Leumel によつて發かれ、他の二高僧は逃走したのであるがそれは既に遅かつた。Omar はそれより一足先きに僧侶連にせまられてやむなく王は殺害の命令を發したあとであつた。狂氣の如くかけつけた Zalmuna も Lemuel の智も既に之を救ふことが出来なかつた。Zalmuna は自殺する。すべての人の心は傷く。只最もいたいたしく傷いた美少女 Adaha の心は砂漠の旅で賊と獅子の災難から救はれた賊の首領で戀のために Jehova に歸依した若き Benoe と新しい戀に再生した。 [Ossaka].

Mi ne ripetos Esperante la arde-laŭdantajn vortojn ĉi-supre metitajn en japana lingvo pri tiu ĉi epokfaranta originalaĵo, pro kiu ni, esperantistoj, povas jam fieri pri la „Esperanta“ aŭ „internacia“ literaturo. Mi nur trovis negravajn preserarojn: p. 73, lasta linio: simpla (anstataŭ simplaj) estis liaj deziroj: p. 176, l. 23: Ŝia (anstataŭ ŝiaj) malsukcesoj; p. 225, l. 28: igi vin negi (anstataŭ nei?) Mi rimarkis; p. 219, l. 6: ŝi elseligis (ĉu en tiu antikva tempo oni havis ian specialan selon, kredeble de formo de ujo, el kiu oni elseliĝas, ne simple deseliĝante?)

◎LA SENDANGEREKO DE FRANCUJO, unu el la problemoj de la paco, tekstoj kaj dokumentoj: André Honnorat; 12×19 cm., p. 158; prezo 5 fr. fr; „L'Idée Française a l'Étranger“ 11, Place de la Bourse, 11, Paris, 1924.

休戦よりヴェルサイユ 平和會議カンヌ會議ローザンヌ會議さらに今日の四國保障條約に到るまで凡ての問題の基調をなしていたフランスの安全保障問題をフランス人の立場から論じた上院議員前國務大臣たるオノラア氏の著の Esp. 譯である。従つて本書はその當時會議に出席しても前後の事情が不案内殊にその主人役フランス代表の熱辯に魅せられてさつぱり自慢のフランス語が役に立たぬ事を悟つた外務省役人並びに新聞記者連が木に竹を接いだ様な報道をして世人をまどわしめた事情を明にするもので、原書は今上述諸フランス語自慢連の種本な

るよし。Esp. 譯は現フランス Esp. 界の働手我 Lingva Komitato の Komuna Vortaro 主任 Grosjean-Maupin 氏修監の下に廿二人の手に成つたものであるが流石は G-M 氏前後文章の統一を殆ど失はぬところは見上げたものである。なにしろ我文獻中この種のもの甚だ稀れであるからその譯出に當つての苦心も一方でなかつたらう従つて或は餘りに原文に忠實であると思はれる箇所もあるが先づ stilo も今後同種の企の参考として十二分のものであらう。あえて一本を國際問題に興味を持つ人殊にこの方面に於て Esp. 語の爲筆を振われん人々にすゝめる。

Unu el la plej bonaj fundamentoŝtonoj por Esp. en politika rondo, bona materialo por estonta laboro samspeca, kvankam kelkaloke la traduko estas tro fidela al originalo: troa uzo de tempo kies anstataŭigo per simpla formo estas preferinda en ordinaraĵoj; (p. 48 l. 5 de malsupre) *oferi* (ĉu *proponi*?) (p. 68 l. 3 k.t.p.) *kontraŭ ian invadon* (sen-*n*) (p. 68 l. 13) *malprobabla* (ĉu *neebla*) *kunkalkulante* (en-). [Ŝindo].

©LA LANGUE INTERNATIONALE, ce que tout militant ouvrier doit connaître de la question, de E. Lanty; 12×19 cm., p. 69; prezo 2 fr. 50; eldonejo Fédération Esperantiste Ouvrière, 177, Rue de Bagnolet, Paris XX^e; 1925.

今日労働者にとって國際語としての 에스ペラントが必要なるべきは論をまたぬ。昨年オックスフォードに開かれた國際労働教育會議が最近労働者間に 에스ペラントが普及され居る状況の報告を調製する決議をしたのは宜である。本書は労働者 에스ペラント界の花役者 Lanty 氏が労働戦線の人々に國際語運動の實狀を知らせるために著したもので、言語統一に至る過程、過程に於ける人道意識の役目、現存國際語、略史、アメリカの發見は二度あらず——エスぺラントの成功、エスぺラントは生きたる言語也、無産階級に對する 에스ぺラントの効用、結論等の數章から成り、雜誌や會の一覽表を附録としてゐる。又『國際的爭議に用意するため國際語 에스ぺラントを學べ』と云つた運輸勞

働國際聯盟のナタンス氏、『エスぺラント創造者を偉人たらしめた所以はあらゆる眞の天才と同様にザメンホフが人造語及運動の發明者と云ふのではなく新時代の強烈な要求を明快完全に解説する先驅者であつたからである』と云つたロマンローラン、其他ルナチャルスキー、パーセル等の肖像と 에스ぺラント評とを挿入してゐる。[Ossaka].

◎『初等 에스ぺラント講義録』 Unuagrada Esperanto-Lekciaro, 豊川善曄; 12.5×18 cm., p. 80, prezo 70 sen; 에스ぺラント教育協會編、東京市本郷區東片町一五二新極東協會發行; 1925.

並に新極東社が通信教授用として發行された謄寫版刷のものを新極東協會の改訂の上印刷に附し發行されたものである。初版當時 *recenzi* した如く三十五課に教材を配し説明も簡にして要領を得てゐる。[Ŝindo]

◎INTERNATIONAL RADIO MANUAL, d. H. A. Epton; 10.5×16 cm., p. 72, prezo 6 d.; the British Esperanto-Association, 17 Hart Street, London, W.C.I; 1925.

パリーの國際 radio-amatoroj 會議に於て其の公用語として採用を決議され又各地に 에스ぺラントの放送があるなど近年 에스ぺラントはラヂーオ界にすばらしい勢でひろまつて行つた。本書は radistoj に對する特別のエスぺラント學習書で簡単な文法練習を掲げ、エス英、英エスラヂーオ用語字典、ラヂオ配線や部分品の挿畫入り術語集、エスぺラント用モールス符號、無線電信符號解説等を附してゐる。來らんとする 에스ぺラントとラヂーオの全勢時代をひかへて時宜を得たる出版物と云はねばならぬ。radio-amatoroj. に一本をすゝむ。[Oss.]

[Daŭrigo de sur p. 127]

“Ni nepre havu “dolĉajn scienculinojn.” Ili neniam estos malpli dolĉaj pro iom de povosciado: kaj “ora hararo” neniam friziĝos malpli gracie ekster la kapo pro tio ke interne estas cerbo.”

—T. H. Huxley.

秋 田 雨 雀 國 境 の 夜

須々木要譯

娘の聲。……あれい…… お父さん…… 早く
来て……人殺し……あ、あ……あ——あ
あ……

(母の聲と子供の聲が入亂て聞える。物を打
つ音。壓迫する音。物の摺合ふ音。器物
の破れる音。)

主人。待て！ お父さんは今直ぐに行く！ 覆
面者の聲。そこを一步でも動くさ承知し
ないぞ！

主人。(燈火を投げ捨てる) 撃つなら撃て！

(主人は燈火を投げ捨て、隣室に突進す
る。)

ピストルの音。

主人の呻く聲。

舞臺は全く暗い。

長い間。)

第 四 節

舞臺が少し明るくなつた時。表の戸を
打つ音がする。

正面と左手のガラス戸から朝日が射し
込む。

アンリシカ。ニシパ、いつまで寝てるんだ
べい？ ニシパの家さお日様晩く照らすだ
か？

主人。(荒々しく戸を開く、そして怖さうに
周圍を見廻はす) やつぱり、もこのまゝ
だ…… (戸に手をかけてまゝ隣室の方を見
廻はす) やつぱり、みんな生きてる……
あゝ何んて夜だつたんだ！

アンリシカ。(戸を叩く) ニシパ、何して
るんだべ？ こゝ開けて呉れるてや。 ニシパ

UJAKU AKITA NOKTO ĈE LANDOLIMO

(Daŭrigo)

Voĉo de Filino.— ... Aree ... Patro
... t-t-tuj venu... Mortigisto ... ha,
... a... a... ha-a-a-a...

(*Intermiksĝas la voĉoj de Pa-
trino kaj de infanoj. Batanta
sono. Premanta sono. Kunpu-
ŝanta sono. Sono de rompiĝo
de iloj.*)

Mastro.—Atendu! Mi tuj iras!

Voĉo de Maskito.—Malpermesite
eĉ unu paŝon moviĝi de tie!

Mastro.—(*forĵetas la lampon.*)—Al
mi pafu, se vi volas!

(*Mastro sin ĵetas en la ĉambron,
lumilon forĵetinte.*

Pafado de pistolo.

Gemo de Mastro.

Tute malluma scenejo.

Longa intertempo.)

SCENO KVARA

(*Kiam la scenejo iom pli lumiĝas,
aŭdiĝas frapado ĉe la ekstera
pordo.*

*Sunradio enfluas tra la pordoj
antaŭa kaj maldekstra.*)

Anriŝka.—Niŝpa, kiel longe ja vi
dormas? Ĉu la suno ja plej
malfrue brilas super la domo de
Niŝpa?

Mastro (*furioze malfermas la pordon
kaj ĉirkauen rigardas en terurita
mieno.*)—Nenia ŝanĝo, ĝuste kiel
antaŭe... (*Enrigardas en la naj-
baran ĉambron, kun mano sur la
pordo.*) Jes ili vivas... Kia estis la
nokto?

Anriŝka (*frapas la pordon.*)—Niŝ-
pa, kion ja vi faras? Malfermu

の家、お日様笑つてゐるべいてや。

主人。(戸を開いてやる。日光が明るく差し込む。) アンリシカ? よく来てくれた。(アンリシカの手を堅く握る。)

アンリシカ。(主人の顔を凝視して) ニシパ 今日何うしたか? 青い顔をしてゐてや。

主人。アンリシカ、火があるか見て呉れ。

アンリシカ。(爐の火を掻き廻しながら) 火うんさあるてや。

主人。然うか、火をどつさり燃して呉れ。

(アンリシカは圍爐裡に木をつぐ。やがて火が燃え上る。)

主人。アンリシカ、よく火にあたつて、己れと一緒にゐて呉れないか?

アンリシカ。ニシパ、何處さ行くんだべいてや?

主人。己れと一緒に昨夜 死人のあつたところへ行くんだ。あの人達は新しい雪の下になつて死んでるだらう よく温まつて呉れ。

アンリシカ。ニシパ、今日何うかしたか? 『シヤモの心は二つある』 つてほんさだてや。アイヌの心はいつでも一つだ。駄目だてや。駄目だてや!

主人。(アイヌの毛深い手を堅く握る) アンリシカ、お前は幸福な人間だ! お前こそほんこの人間なのだ!

(主人はアイヌをだきかゝへるやうにしていつまでも離さない。)

— (幕) —

S-ro K. Susuki, tradukinto de tiu ĉi dramo, veturis en Usonon; lia adreso estas: P.O.

ja tiun ĉi pordon. La suuo ja ridas super via domo.

Mastro (*malfermas al li la pordon. Sunradio hela envenas brile.*)—Anriŝka? Bonvenon! (*firme premas al Anriŝka la manon.*)

Anriŝka (*fikse rigardante en la vizaĝon de Mastro.*)—Niŝpa, kio ja estas kun vi hodiaŭ? Vi estas ja tre pala.

Mastro.—Anriŝka, vidu, ĉu la fajro ankoraŭ restiĝas.

Anriŝka (*inicitante la fajron en la kameno.*)—Jes, multe da fajro ja.

Mastro.—Ĉu? Do lasu la fajron brulegi.

(*Anriŝka aldonas lignojn en la kamenton. Baldaŭ ekbrulas la fajro.*)

Mastro—Anriŝka, varmigu vin kaj ĉu vi ne iros kun mi?

Anriŝka.—Niŝpa, kien ja ni iros?

Mastro.—Vi iru kune kun mi al la loko, kie hieraŭnokte la geviroj mortis. Ili ja estos nun senvivaj sub la nova neĝo... Vin plene varmigu.

Anriŝka.—Kio estas ja kun vi hodiaŭ, niŝpa? La diro, „Ŝamo havas du korojn“ ja estas prava. La koro de aino ĉiam restas unu. Ni ne povas helpi al tio, helpi al tio.

Mastro (*firme premas la harriĉan manon de la aino.*)—Anriŝka, vi estas feliĉa homo! Vi ja estas vera homo!

(*Mastro duone enbrakigas la ainon kaj tiel restas por longa tempo.*)

— Kurteno —

Box 79, Orange, Texas, U.S.A.

NUNIEZ INTER BLINDULOJ

(めくら人)

Prof. T. Ito

(2)

Kompatindaj estas ili, kiuj mem fosas sian tombokavon.

Ni rompu ilian kategorion. Ni veku ilin el paralizo.

Verda stelo brilas pace kaj hele, kiu kondukas nin al eterna vero, bono kaj belo malgraŭ ĉia ventego kaj ondeggo.

Ne kuŝas paradizo ekster nia mondo, sed troviĝos surtere en la tago, kiam la tuta homaro formiĝos en unu grandan rondon familian!

Oni ne povas ĉi tie lasi rimarki, ke mi pli amas naciismon en ĝusta senco, pri kiu prave kaj rezolute argumentis Grafo J. Futaara („Fikse rigardante la patrujon,” *Ĵurnalo Tokio Asahi*, la 20-32-an Jan., 1925,) ol kosmopolitecon sen profunda introspekto.

Ĉu kiel nacio oni ne povas ami alilandanojn, kvazaŭ frato prizorgas sian fratinon?

La naciismo, sub kies masko militaristo akriĝas ungon kaj kiun malprogreseculo devige alpremas sur nin, estas pagamismeca, kian ni definitive rifuzas.

Revon aŭ sonĝon mi ne volas prediki; idealo sen ago estus utopio nerealigebla.

La Esperantismo ne konstruas kastelon sur sablo, sed katedron por homaro sur la tero.

Ĝi devas esti antaŭ ĉio praktika movado propagandi la lingvon Esperanto kaj samtempe ankaŭ idealisma movado kun homarana ideo.

Unue propagandi la lingvon, due

sopirserĉi la idealon, kaj denove sur ĉi tiu idealo propagandi la lingvon: la Esperantismo fariĝas sur tia reciproka interrilato nedisigebla.

La praktika movado, sur kiu bazas sin la Esperantismo, kaj la homarismo ideala formas nature ambaŭ flankojn de unu ŝildo. Alivorte, ĝuste kiel ĉe ĉiuj modernaj sociaj movadoj, unu entenas la internacismon kaj la alia la pacifismon. Ĉiu ĉi tiu estas parto de l'tuta ismo, kiu ne kompletigas per nur unu parto. Neniu el ili estas perfekta per si mem. Multaj disputoj kaŭziĝos de ĉi tiu punkto.

Grava trompiĝo estas la diroj de utilisma pozitivismo, kiuj elpuŝas la idealismon kiel gloradmiron sentimental, sed ankaŭ sulta estas idealisto, kiu eĉ ne akceptas praktikan flankon.

Propagando de la lingvo antaŭ ĉio formas la bazon kaj la homarismo devas esti la esenco de l'vivo de la tuta homaro, al kiu oni nepre oferu ĉion de sia flanko.

La Esperantismo ne perfektigas, se al ĝi mankas eĉ unu parto; anbaŭ flankoj de la ismo devas troviĝi unuiĝante en unu korpo.

La Esperantismo sen lingva problemo estas tro utopia, kion prediki neniel utilos.

Konstrui templon idealan sur praktika movado estas en ĉiu rilato origino kompletigi la veran ismon, kaj la homarismo estas esenco de ĉi tiu ismo, sen kiu neniam sendifekta estas la ismo.

Facile estas vidi fenomenon aperantan antaŭ niaj okuloj, sed ĉi tiu sola ne estas la tuto de la vera homa vivo. Ni ne devas forgesi la noblan idealon fundamentan. (al p. 25)

MENDELISMO

Parolado farita ĉe la kunveno de J.E.I.
kun kelke da aldonoj.

de *Hidemiti Oka*

Hodiaŭ vespere mi havas grandan honoron doni lekcion Esperante antaŭ tiel lertaj Esperantistoj kiel vi. Mia temo estas, kiel jam anoncite, Mendelismo. Hodiaŭa parolado estas por mi speciale ĝojiga kaj memorinda, ĉar la temo pri kiu mi parolas estas elektita el mia amata scienco biologio, dum la lingvo en kiu mi parolos estas mia kara Esperanto.

Se vi demandus al iu ajn biologo, kio estas la plej prospera branĉo de biologio en la nuna jarcento, li senhezite respondus Mendelismo. Miloj da scienculoj de plej diversaj landoj —scienco ja ne havas landlimon— sin dediĉas al la studo de tiu ĉi nova scienco, kies fondinto estis neniu alia ol Gregor Johano Mendel.

Nuntempe la vorto Mendelismo tiel vulgariĝis, ke vi ĉiuj konas ĝian nomen kaj ankaŭ ĝian enhavon per ĵuroaloj aŭ gazetoj, sed, karaj samidenoj, kiu povus aserti ke ĵurnaloj ĉiam donas al la legantaro la veran komprenaĵon pri sciencaj temoj? Doni al vi la precizan konon pri Mendelismo en la plej konciza formo estas la ĉefa celo de mia parolado.

VIVO DE MENDEL

Mendel naskiĝis en 1822, en Aŭstria Silezio, en Hilzendorf, kaj en 1843 eniris en la Augustinan monaĥejon ĉe Altbrunn kiel novico. Li fariĝis pastro en 1848, studis poste en Vieno; kaj en 1853 revenis al la monaĥejo. Tuj li komencis sian mondfaman eksperimenton pri pizo,

kaj post 8-jara senĉesa laborado, publikigis la rezultaton akiritan en la bulteno de l' naturscienca societo de Brunn. Lia traktaĵo „Kreskaĵaj hibridoj“ (Pflanzen-hybriden) de nur 40 paĝoj fariĝis poste granda biologia klasikaĵo. Sed kiam ĝi aperis, neniu povis rekoni ĝian grandan signifon. Kiuj ĝin legis, tiuj nek aprobis nek rifuzis lian teorion. Mortiga silentado! Dum 35 jaroj ĝi restis nerimarkite, ĉar dum tia periodo biologoj ĉefe sentis intereson en la evoluadoteorio de Darwin, preskaŭ forgesante ĉion alian. En 1900, tamen, lia traktaĵo estis eltrovita preskaŭ samtempe de tri eminentaj botanikistoj, t.e. De Vries de Amsterdam, Correns de Lejpsigo kaj Tschermak de Vieno.

La lastaj jaroj de Mendel ne estis feliĉaj, ĉiam kontraŭbatalante kontraŭ la ŝtataj administrantoj kiuj lin subpremris pro religiaj aferoj. En 1884 li mortis plena de indigno, ne sciante la famon, kiu estis alvenonta al li post 16 jaroj.

Kiel vi vidas, Mendel estis nek profesoro de biologio¹ nek granda botanikisto, tamen faris tiel grandan, eble grandiozan eltrovon en la kampo biologia. En la historio de homa civilizacio, precipe de scienco, kulminantaj punktoj estis tre ofte donitaj de nespecialistoj, kiujn arogantaj specialistoj nomas laikoj, tute same kiel en la historio de artefarita lingvo la difinita direkto estis montrita de nia Majstro, kiu ne estis specialisto en lingvistiko.

Mi forte deziras, ke ankaŭ el vi aperu tiel granda laiko kiel Mendel aŭ Zamanhof. (daŭrigota).

¹ Iam li estas instruisto de naturscienco ĉe la reallernejo de Brunn.

PERSISTA STANA SOLDATO

頑張り屋の錫の兵隊さん

アンデルセンのお伽噺

ザメンホフ博士エス譯

註譯 松崎克己

(5)

„Kien mi nun venos?“, li pensis „jes, jes, tio estas kulpo de la koboldo! Ha, se almenaŭ la malgranda knabino sidus ĉi tie en la ŝipeto, tiam mi ne malĝojus, se eĉ estus duoble pli mallume!“

『どこまであればこりや (nun) 行くのかな!』と兵隊さん (li) は思ひました。『そうも、そうも、これやあの鬼めのせいだ! あゝ、せめて (almenaŭ) あの小さい娘さんが此處に、小舟の中に居る (sidus) のなら (se..., tiam), よしや (se eĉ) 二倍も (du'oble pli) 暗くつたつて、悲しみはしないのだからア』

{iri (歩く本人が本位で)行く

{veni (到るべき地點から見て其處へ)行く、来る

Ĉu vi nenos al mi morgaŭ?

明日僕の處へ来るか

Jes, mi venos al vi morgaŭ.

明日行き(參上し)ませう

Atendu ĝis mi venos.

今行くから待つて居れ

Kien mi nun venos?

この勢ぢや (nun) 何處へ行くこそだろ
う。

Li estas kulpa pri tio.

これは彼のせいだ(彼が悪いのだ)。

En la sama momento aperis granda akva rato, kiu havis sian loĝejon sub la stratdefluila ponto.

„Ĉu vi havas pasporton?“ demandis la rato. „Tuj montru la pasporton!“

Sed la stana soldato silentis kaj nur ankoraŭ pli forte tenis sian

paŝilon. La ŝipeto veturis pluen kaj la rato ĝin sekvis. Hu, kiel ĝi grincigis la dentojn kaj kriadis al la lignetoj kaj pajleroj: „Haltigu lin, haltigu lin! Li ne pagis doganpagon, li ne montris sian pasporton!“

それと同時に姿をあらはしたのは (aperis) 大きなごぶ鼠、そ奴は (kiu) ごぶ板の下に住家を (loĝejon) もつてゐたのです。

『貴様旅行免狀を持つちよるか』と鼠はききました。『さつささ (tuj) 見せろ』

然し錫の兵隊さんは黙つてゐましたそして鐵砲をなほ益々しつかさにとぎりしめてゐました。小舟は先へ先へと (plu'e'n) 走つてゐき、鼠はそれを追ひかけました。へッ(Hu), 何さまア鼠先生齒ざしりをし木の片だの藁層 (pajl'eroj) に向つて呼んでゐましたこと: 『奴を停めろ。奴を停めろ! 此奴は關稅を (dogan'pagon) 拂はず、旅券も見せ居らん』

La neĝo faladis (ĉiam) ankoraŭ pli forte = faladis ĉiam pli kaj pli forte. 雪は益々ふりしきる。

{Ni venturis sur la ŝipo. 船で航海する。
(La ŝipeto veturas sur tiu ĉi rivero. その船は此の川を通つてゐる。

La dentoj al li grincis = Li grincigis la dentojn = Li grincis per dentoj. 齒ざしりをした。

Sed la fluo fariĝis ĉiam pli kaj pli forta; jam antaŭ ol li atingis la finon de la ponto, li povis ekvidi la tagan lumon; sed samtempe li ekaŭdis bruan tonon, kiu povis ekstimigi la koron eĉ de plej kuraĝa viro. Prezentu al vi, ĉe la fino de la ponto la stratdefluilo falis ĝuste en grandan kanal'on, kio per li estis same danĝera, kiel por ni la ŝipveturado malsupren sur granda akvofalo.

然し流れ (fluo) は益々 (ĉiam pli kaj pli) 強くなりました; 既に兵隊さんはごぶ板の端の處まで行かない内に (antaŭ ol li atingis)

日の光を認め (ek'vidi) 得ました; 然し同時に (sam'tempe) 轟々たる (brua) 音を耳にしました (ek'aŭdis), その音たるや (kiu) 最も勇敢な男子の心膽 (la koron) さへも (eĉ) 寒からしむる (怖れしむる ek'tim'igi) に足りたのです (povis). まア考へても御覽なさい (Prezentu al vi), ごぶ板の端の處でごぶは大きな下水 (kanalon) の内へ丁度 (ĝuste) そゝいでゐました (落ちてゐた) のです, 是は (kio) 此の兵隊さんにさつて危険なること, 丁度 (kiel) 吾々にとつて大瀑布 (akvo'falo) を逆落しに (mal'supre'n) 乗り切る (ŝip'ventur'ado) のと同様です (same..., kiel...).

Revenu antaŭ la vesperiĝo = Revenu antaŭ ol vesperiĝos. 日がくれぬ内にも歸り。

Prezentu al vi (=Imagu al vi), mi estas en terura situacio sen eliro. まア想像しても見てくれたまへ, 僕は二進三進ゆかぬ (出るに出られぬ) 恐ろしいは目になつてゐる。

Li estis nun jam tiel proksime, ke li ne povis halti. La ŝipeto naĝis malsupren, la kompatinda stana soldato tenis sin, kiom li povis, tute rekte. Neniu povus diri pri li, ke li eĉ palpebrumis unu momenton per la okuloj. La ŝipeto turniĝis tri aŭ kvar fojojn kaj pleniĝis de akvo ĝis la rando, ĝi devis droni. La stana soldato staris en akvo ĝis la kolo, kaj la ŝipeto iris ĉiam pli kaj pli profunden. Ĉiam pli kaj pli la papero dissolviĝis; jen la akvo iris jam super la kapon de la soldato. Tiam li pensis pri la malgranda ĉarma dantistino, kiun li plu neniam vidos; kaj en la oreloj de la stana soldato sonis:

„La tagiĝo, la tagiĝo
Estos mia neniigo!“

彼はもう (今既に uun jam) 非常に近寄つてゐましたので (tiel..., ke) 止まることは出来ませんでした。小船は逆落しに流れてゆき, かわいそうな (kompat'inda) 錫の兵隊さ

んは出来るだけ (kiom li povis) からだをまつすぐにいたしました (tenis sin tute rekte). 彼が一寸でも (unu momenton) 瞬一つした (palpebr'umis per la okuloj) なごご誰か敢て評し得ませうぞ (povus diri pri li). 小船は三, 四回キリキリまい (turn'igis) 水が舟べり (rando) まで一杯になり (pleniĝis de akvo), 沈まんさいたしてゐます (devis droni). 錫の兵隊さんは首まで水につかつて (en akvo) 立つてゐました, そして船は益々深く深く沈んで行きました (iris... profunden). だんだんだんだんさ紙はほぐれました (dis'solv'igis): あれ水はもう兵隊さんの頭を越しました (iris super la kapon). その時彼はもう二度と遇へぬ (kiun li plu neniam vidos) あの小さなかわいらしい舞姫のことを想ひました; するさ兵隊さんの耳にひびいて來ました——

『あかつきよ, あかつきよ (tag'igo)

そは我があかつきよ!』

tiel ~, ke... 非常に ~ なので...

Li estas tiel naŭva, ke li kredas ĉiun homon. 彼は非常に朴訥なので誰の云ふ事でもまに受ける。

teni sin = teniĝi 身を持する, ...の態度をこる; sinteno = teniĝo 態度

nenio 何にも無い; neniigo 皆無になること, むなしくなること, 滅亡。

Jen la papero dissiriĝis, kaj la stana soldato trafalis, sed en la sama momento lin englutis granda fiŝo.

處が紙は切り裂けました (dis'sir'igis), そして錫の兵隊さんは落ち込んでゆきました (tra'falis), 然しその瞬間に彼をば大きな魚が呑み込んでしまひました (en'glutis).

〔應用作文〕

1. 彼は老て益々隆んだ

En sia maljuna aĝo li ankoraŭ pli aktive laboras.

2. なみなみさつがれたコップ

Glaso plenigita ĝis la rando.

3. ボートを流れにまかせて川を下つた

Ni lasis la boaton naĝi malsupren sur la rivero.

4. 彼は借金に首つたげばまつてゐる

Li sidas en ŝuldoj ĝis super la ŝultroj.

懸賞作文被露

(四月號出題)

初等科

(1) Mi ankoraŭ ne havas plezuron lin vidi. (酒卷至弘君)

『お目にかゝる』は vidi iun で renkonti iun (行き合ふ, 出遇ふ)ではない。renkonti amikon survoje = 道で友達に遇ふ; renkonti malfeliĉon = 不幸な目に遇ふ; Kie ni renkontiĝu? = 何處でも會ひ致しませうか; renkontiĝi vizaĝon kontraŭ vizaĝo kun iu = (偶然にも)鼻をつき合はせる。又 koni を使つた方もあるが koni の意味は次の通りである。koni iun = 誰々を知つてゐる; konatiĝi kun iu = 知り合ひになる; koni la aferon = 其の事は熟知してゐる等。『...したことがございませぬ』は丁寧な言葉だから ne havi plezuron (aŭ honoron) iun vidi とすべきである。

(2) Mi tre volus lin vidi, se vi bonvolus (esti afabla) konatigi min al li. (小杉重太郎君)

『紹介する』は prezenti iun al iu; konatigi iun al iu; lasi iun fari konatecon kun iu 等。『面會する』は vidi; intervidi; rendevui (約束して會合す) 等である。『...したい』は volus で Mi volus iri. = 行き度い。『...して下さい』は (bon-)volus で Ĉu vi ne bonvolus havi komplezon (aŭ bonecon) transdoni al mi la libron = 一寸その御本をおかし遊ばせ。元來 „-us“ の用法は (1) 假定(條件文) (2) 尊敬 (3) 疑問であつて此處では共に尊敬の用法である。

(3) Lia patro mortis antaŭ ne-longe. Kaj oni diras, ke tio, kion li heredis de li, estas nenio alia ol monŝuldoj.

Li perdis la patron antaŭ kelkaj tagoj; kaj famo diras, ke lia heredaĵo estas nenio krom grava monŝuldo.

『借金ばかりだ』は『借金その他何もない』と譯すのがいい。『...だそうな』は上に用ひた

他 mi aŭdas, ke...; estas dirite, ke... 等もある。

成績表 [優] 小杉重太郎、酒卷至弘(賞)の兩君。

[良] 藤井芳雄、木全彌吉、福田みはや、龜井敬治郎、湯淺武進、Sakurai Jinkiĉi, 村生の諸君。

[可] 神戸和子、渡邊慶良、夏南、都築喜三、青井浩志、菊地保、今泉啓助、深川三代助、西川利藏、藤村英夫、石川米子、大森志郎、久住昌男、川又憲治、松崎憲、ekzamenato, 竹内、竹田、Kaĉjo, Ondo, Kenĉjo, Verduleto, nokto の諸君。

高等科

(第一部)

Estas ĉirkaŭ tagmezo en la paca tago en printempo. La junaj foliaroj de aceroj forte presis siajn siluetojn sur la herbetaron, kiu jam sufiĉe kreskis en freŝan verdon. Du hundetoj: la patrino trankvile dormas tie kun sia infano en la patrinaj plaĉaj brakoj pro facila laceco de ludo. Sur iliajn nigrebrilajn haŭtojn flirtas du-tri petaloj de ĉerizfloroj. Venteto ekblovas. Eksanceliĝas la ombroj de l'arbustoj. Ekkvakas ranoj. La patrino hundo, kiu ekskuis al si la orelajn lombojn kun facila movo, ree sin allasas en ĝuadon de dolĉaj sonĝoj.

『新風の影繁く』は Ĵeti sian ombron と譯すことも出来、『二つ巴にれてゐる』は kuŝi unu kun la alia; dormi flanko ĉe flanko でいいでせう。„kreski en freŝan verdon“ は『緑滴るばかりに...』『水々しい緑に...』『新緑鮮かに...』の意味で若葉の繁り行く様の形容にばいと思ふ。

成績表 [良] 木全彌吉、都築喜三(賞)、前川周治、深川三代助、小杉重太郎、ABK, Ondo の諸君。

[可] 大森志郎、久住昌男、小池英三、藤井芳雄、川又憲治、渡邊慶良、竹田、K.

Marono, Kenêjo, J. Sakurai, 湯の町生の諸君。

自由作文は八月號に披露する筈である。

採點は問題の質如何に關らず其の出來方によつて優良可不可の四種に大別する。答案は應募規定に違反するものは受付けぬことにする又高等科で良以上の成績を取る方の初等科の答案も亦同じである。(王且陳生)

懸賞作文課題

初 等 科

(1) 君はそのことを言はなかつたのかい。いえ、言ひましたとも。

(2) 私に鉛筆を呉れたのは此の方ではなくあの方でした。

(3) 今度の先生はあまり早口に喋るので何を言つてゐるのだからさっぱり解らぬ。

高 科 等

(第 一 部)

堤下に灯がぼつりと點く、弘福寺の鐘が鳴る、隅田川は對岸の淺草から暮れそめて、待乳山が水に沈んで、觀音の龕も五重の塔も掻き消される。花川戸、今戸、橋場の夜の幕は張られて家々から洩る、燈火の涼しげに水の流る、様の美しさは、この向島の命である。(田村西男 絃歌夜話——夜の東京 113 頁より)

(第 二 部)

エス語自由作文課題『夕涼』文體及字數に制限なし。締切七月末日。

規 定

高等科第二部の他締切は七月二十日限り。答案は中判罫洋紙に一行置きに書くこと。各科各部用紙を異にすること。學會内懸賞作文係宛のこと。賞三名。〔わし生〕

海外概況

◎世界最大の百科辭典たる Enciclopedia Espana (スペイン語) は既に各冊二千頁で四十卷まで發行され、なほ十五乃至二十卷で完結されるのであるが、各語には佛英伊獨ホルトガル、カタルナ語及びエスペ란トの譯語がつけられてゐる。

◎Köln の Gimnazio ĉe St. Aposteln の學生 Theo Dohmen 氏からの來狀によると獨逸ではエスペ란ト語を知れる教師の居る中等學校では出来るだけエスペ란トの講座を設けよと云ふ法令が出た。同氏の學校では D-ro Dieninghoff 氏がエスペ란トの教授を受持つてゐる由。そして『日本の中等學校でもエスペ란トを必修科目としてゐますか』との質問、少々恐縮。

JAPANA DELEGITO ĈE LA DEKSEPA

S-ro Teizo Ezaki, asist-prof. de Agronomia Fakultato, Kiuŝu Imperia Universitato, kiu nun restas en Francujo, ĉeestos la Sepan Universalan Kongreson kiel delegito de Japana Esperanto-Instituto. S-ro Kôgecu Niŝimura el Ajabe ankaŭ ĉeestos la Kongreson kiel delegito de Oomotoismo.

第十七回萬國大會

出席日本代表

本夏ズキツツル ジュネーヴ にかれる第十七回 萬國エスペ란ト大會に佛國滯在中の九州帝國大學 農學部 助教授江崎悌三氏に乞ふて我が日本エスペ란ト學會代表として出席していただくことにお願いしました。西村光月氏は大本教代表として同大會に出席のため日本を出發せられた。

芥川龍之介

二つの手紙

梶 弘和譯

(前號の續き)

これで見ると、Doppelgeanger の出現は、死を豫告するやうに思はれます。が。必ずしもさうばかりとは限りません。Dr. Kerner は、デイレニウス夫人と云ふ女が、六歳になる自分の息子と夫の妹と三人で、黒い着物を着た第二の彼女自身を見た時に、何も變事の起らなかつた事を記録してゐます。これは又、さう云ふ現象が、第三者の眼にも映じると云ふ、實例になりませう。Stilling 教授が擧げてゐるトリツプリンと云ふワイマールの役人の實例や、彼の知つてゐる某 M 夫人の實例も、やはり、この部類に屬すべきものではございませんか。

更に進んで、第三者のみに現れたドッヘルゲンゲルの例を尋ねますと、これも亦決して稀ではございません。現に Dr. Werner 自身もその下女が二重人格を見たさうでございます。次いで、ウルムの高等裁判所長の Pfizer と申す男は、その友人の官吏が、ゲツテインゲンにゐる息子の姿を、自分の書齋で見たと云ふ事實に、確な證明を與へて居ります。その外、「幽霊の性質に関する探究」の著者が擧げて居りますカムバアランドのガアクリントン教會區で、七歳の少女がその父の二重人格を見たさう云ふ實例や「自然の暗黒面」の著者が擧げて居ります H 某と云ふ科學者で藝術家だつた男が、千七百九十二年三月十二日の夜、その叔父の二重人格を見たさう云ふ實例などを數へましたら、恐らくそれは、夥しい數に上る事でございませう。

講習用書

小坂猪二著。四六版六十餘頁。定價五十錢、郵税二錢。十部以上割引。文法及練習二十四頁、讀本三十餘頁、音符二曲。いやしくもエスペラントを學んだと云へるに必要な知識を授ける標準的講習用書である。

RJUNOSUKE AKUTAGAŬA

DU LETEROJ

Tradukita de H. Koji.

(3)

Laŭ la supraj ekzemploj la apero de „Doppelgaenger“ ŝajnas esti la antaŭsciigo de morto. Sed la afero ne ĉiam iras tiamaniere. Dro Kerner skribas, ke kiam S-ino Delenius vidis la duan sin mem en nigra vesto knne kun siaj sesjara filo kaj bofratino, nenio stranga okazis. Ĉi tio povas esti vivanta, evidenta ekzemplo, ke tia fenomeno estas videbla al krompersonoj ankaŭ. Okazoj de Tripmann, Weimara oficisto, kiun priskribas Prof Stilling, kaj de S-ino M., lia konatolino, ankaŭ devas esti enklasigita en ĉi tiun specon.

Kaj plue kiam ni serĉas la ekzemplojn, kiuj aperis nur al krompersonoj, ili ankaŭ ne estas maloftaj. Oni diras, ke Dro Werner mem vidis la *doppelgaenger* de sia servistino. Kaj Pfizer, estro de l' supera juĝejo en Ulm, danas firman certigon al la fakto, ke li vidis en sia studĉambro la figuron de sia filo, kiu tiam estis en Göttingen. Krom tiuj la okazo, citata de l' aŭtoro de „Esploroj pri la Naturo de Fantomoj“, en kiu sepjara knabino en la paroĥo Carclington, Camperland, vidis la *doppelgaenger* de sia patro, aŭ la okazo, citata de l' aŭtoro de „Mallumaj Flankoj de l' Naturo“, en kiu iu H, sciencisto kaj artisto, vidis la *doppelgaenger* de sia onklo en la nokto de la 12-a de Majo, 1792, — se oni kalkulas ilin kaj similajn, la ekzemploj estos kredeble ja multenombraj.

(Daŭrigo)

ENLANDA KRONIKO

(内地普及だより)

©TOKIO.—Je 15-a h., la 14-an de Majo Iĉikô Verdstela Klubo de I-a Nacia Kolegio okazigis en klasallongego propagandan kunvenon; parolis S-ro ing. K. Ossaka kaj Prof. D-ro S. Niŝi; post la paroladoj oni havis tre gajan tepartion de la studentoj kun S-roj Ossaka, M. Inoue R. Hasegawa, kaj H. Oka, gradigitoj de la Kolegio.—Iu Dai-Nippon Bunka Gakkai (Japana Kultura Instituto) ĵus fondita volis organizi Esp. kursom kaj sin turnis al nia J. E. I. kaj S-ro T. Juri, nia sperta komitatano, bonvolis preni sur sin la gvidadon de l' kurso, kiu komenciĝis kun ok l. de la 19-a, po 2 horoj vespere ĉiujn mardon kaj ĵaŭdon, en Asocio de Junaj Kristanoj, Kanda (YMCA).—La 27-an, la 4-an merkredon de la monato, oni havis kutiman monatan kunvenon de sciencaj lekcioj; D-ro T. Oŝida faris mikroskopajn demonstraciojn kaj ing. K. Ossaka parolis pri aŭtomataj kupliloj de fervojaj vagonoj kun la elmontrado de modelo.—La katastrofo de l' jaro 1923 forbruligis ĉiujn taŭgajn publikojn domojn kaj nebligis al ni aranĝi propagandan kunvenon por preskaŭ 2 jaroj. Tio estis ja granda bedaŭro por Tokiaj samideanoj, sed la urbego estas progrese rekonstruita, kaj en Teidai Bukkjô Seinenkai-kan (Asocio de Junaj Budaistaj Universitatanoj), Hongo, posttagmeze Sabaton, la 6-an de Junio, oni okazigis publikan kunvenon de paroladoj. Ĉar estis en pluva sezono kaj la pluvado ne permesis al ni „traafiŝi“ la stratojn ĝis ĵaŭdo, ni tre timis, ke ni ne havos bonan sukceson. Tio ta-

men estis nebezona timo; la salonego plenigis 250 aŭskultantoj. La programo estis:

Malferma parolado, de D-ro K. Nakamura.
„Radio kaj Esperanto“, en Esp. de ing.

K. Ossaka sub la lerta interpretado de S-ro H. Ŝuzui, stud. de Imp. Univ.

„Strukturo de Esp.“ de S-ro Masuzo Inoue, fervoja oficisto.

„Alpreno de komuna lingvo por la servo de sciencoj“ de D-ro Masataka Murata.

„Pri kampoj de l' internacismo“ de S-ro Ujaku Akita.

Ferma saluto de S-ro Mamiĉi Hori, juĝisto.

Tiu sukceso certe kuraĝigis Tokiajn samideanojn preni pluajn paŝojn por la propagando en la proksima estonteco.—Tiun saman vesperon oni havis vere agrablan vespermanĝon; ĉeesks 35 ges-oj (7 esperantistinoj); partoprenis kiel gasto D-ro Masataro Saŭajanagi, fama edukisto, parlamentano, kiu multe favoradis Esp. movadon kaj klopodis pri nia petskribo pri-Esp-a ĉe la Parlamento. Ĉe la deserto, post flua parolado de S-ro Ossaka en Esp. D-ro Saŭajanagi raportis pri siaj estintaj sintenoj favorantaj por Esp., kiam li estis en eksterlando kaj bedaŭris, ke li estas tro maljuna por lerni la lingvon kaj ke krom tio li ne havas volon ĝin lerni. D-roj Asaziŝi Oka kaj Ramstedt faris tre spritajn paroladojn en elokventa Esp. aludante, ke ellernado de Esp. ĉe maljuneco estas ebla. Junaj s-anoj kiel Ŝuzui, J. Ŝibata, H. Kuraĉi, ankaŭ ne lasis okazon lin admoni. Tiel vespere tre gaje forpasis.—De la 9-a de Junio Japana Kultura Asocio malfermis la duan kurson sub la gvido de ing. Ossaka po 3 horoj vespere ĉiujn mardon kaj ĵaŭdon; ĉar kiel supre dirite, la unua kurso ne estis bona sukceso havante nur 8 l., pro

simpatio S-ro Ossaka, spite de trookupiteco pro niaj aferoj, prenis sur sin la gvidaton de la dua por kovri la monperdon suferitan de tiu Kultura Asocio; la nova kurso akiris 18 l.—

◎MACUZAKA, Mie-ken—Esperantan kurson por komencantoj oni aranĝis de la 24-a de Aprilo por semajno en ĉitea komerca lernejo kun pli ol 30 lernantoj. Post tiu kurso S-ro Marujama gvidis tiujn kursanojn uzante la libron „Esp-ta Kurslibro de Jagi en ĉiu lundo kaj ĵaŭdo. (Raporto de S-ro T. Ŝioi).

◎NAGOJA—Unue ni reportas, ke „Ligo de Nagoja Esperanta studentaro“ ŝanĝis la nomon „Esperanta Federacio de Nagojaj Studentoj“, kiu nun konsistas el du komitatanoj — S-roj K. Nakauĉi kaj J. R. Katoh kaj sennombraj federacianoj, sed tamen tre vigle movadas:—Ni decidis aranĝi kurson por komencantoj po kvar fojoj ĉiujare laŭ la sezonoj kaj sub la aŭspicio de Ĵurnalo Nagoja Ŝimbun, S-ro Katoh gvidis „la vintran kurson“ (22-27 de Jan.) kaj S-ro Nakauĉi la printempan kurson (6-12 de Aprilo)—La 15-ap de Febr. vespere ni aranĝis en Bunka-Ĉaja adiaŭan kunvenon por la komitatanoj, kiuj baldaŭ forlasos la urbon, gradiĝinte de lernejo. Se ni citas iliajn nomojn, ili estas S-ro Itoh, stud. de Nagoja Teknika Kolegio kaj S-ro Kozo Takahaŝi, stud. de la Oka Nacia Kolegio. Bonŝance samideano K. Nakamura el Tokio tiam vizitis la kunvenon—La 14-an de Aprilo vespere ni aranĝis kunvenon por la datreveno de l' mortigo de D-ro Zamenhof en Studenta Klubo kun 20 ĉeestantoj:—La 19-

an de Aprilo posttagmeze pensantoj, artpentristoj, Esperantistoj, socialistoj kaj poetoj k.c. kunvenis en Studenta Klubo por aranĝi paroladkunvenon pri la temo „Pri la nova vivo.“ S-ro Nakauĉi faris paroladon en Esperanto, kiun interpretis japanen S-ro Katoh. Fine ĉiuj esperantistoj ĥore kantis „La Esperon“ kaj „Tagiĝon“—Ĉiun mardon vespere en Studenta Klubo ni aranĝas „Esperantan Lekcion“ por urbanaj samideanoj.

◎NAGASAKI—Nagasaki E-ta Societo aranĝis propagandan kunvenon en la 30-a de majo. Aŭtoroj:—S-ro K. Ueda, Prof. T. Ito, Prof. H. Asada, Prof. H. Oŝima, Prof. Fuĵisaŭa.

◎HIMEĴI—S-ro J. Kijono fondis Esp-tan Grupon en la 22-a de majo en Himeĵi Nacia Kolegio.

◎TOBATA—En la 31-de majo la Esperanto-Fako de Budaisma Savadistaro aranĝis propagandan kurson en Urboj Tobata, Uakamacu, Kompirajama, kaj Jahata. (Raporto de S-ro Nakaniŝi.)

◎TOMIOKA—Invitinte S-ron J. Niŝikaŭa el Jokohama, ni aranĝis esperantajn kursojn de la 1-a de majo. Unu en Tomioka Knabina Liceo kun 50 lernantinoj, la alian en Tomioka Liceo kun decaj nombroj da lernantoj. Post la kurso en la knabina Liceo, dank' al fervora klopodo de S-ro J. Niŝikaŭa, fondiĝis esperantista Grupo. (富岡高女エスペラント會) (Raporto de S-ro H. Ŝinohara).

◎TOKUŜIMA—ni denove starigis Esp.-Grupon (Tokŝima Esperanta Grupo) kaj komencis viglan propagandun movadon kaj kurson subla

gvido de S-ra J. Niŝikaria el Jokohama kun 30 gelernantoj por 10 tagoj de la 24-a de majo.

◎BEPPU—La 4-an de majo vespere ĉe la dua naskiĝdatreveno de Beppu Esp-ista Grupo ĉitieaj samideanoj okazigis ĉiujaran kunsidon en Kamenoi-Hotelo. Gravaj decidoj tiam faritaj estas jene:

1. Ŝanĝi la nomon de la grupo en „Beppu Esperantista Grupo“ anstataŭ „Beppu Filio de J.E.I.“

2. Fari peton al la komitato de J.E.I. je revivigo de eldono de jarlibro en tiu ĉi jaro.

◎HIROSAKI—Hirosaki Esp-ta Societo aranĝis kurson sub la gvido de S-roj J. Narita, K. Narimi kaj M. Takada por semajno de la 1-a de junio por tieaj komencantoj.

出でたり眞摯な研究書

エスペラント

發音研究

岡本好次著

日本エスペラント學會發行

日本にエスペラント運動が起つて滿十九年、もう徒にエスペラント學習の容易を誇張して説き乍ら自らは怠けてゐる宣傳家は引込むべき時代になつてゐる筈である。活用の時代、それは日本エスペランティストの覺醒を要求し、一層の勉強を要求する。本書は菊版八號密組み六十餘頁の大著述で或は日本語、或は歐洲語と比較し、理論を説き活用を教へエスペラントの發音に就て縱横に論じてゐる。定價五十錢、郵税二錢。

質 疑 應 答

(Lingvaj respondoj)

◎小坂氏著イソップ物語に Leciono Unua があり、英語にては Lesson One, Two... なり。エスペラントにては順序數を使用するものにや。(松阪初心の會員)。

〔答〕『第何番目の課』の意である故順序數を用ふる方が正しい。年號なども亦然りである: 1925=la jaro mil-naŭcent-dudek kvina.

◎同書二頁三行目に rosoj と有り同語には物質名詞無き哉。(同氏)

〔答〕無い事はありません。例へば biero, akvo, mono, bovaĵo など。或る名詞は物質名詞とも、普通名詞とも用ひられ得ることは英語でも同様です(普通名詞ならば複数形になり得る)。roso も物質名詞(akvo, mielo などの類)とも、又普通名詞(akvoguto などの類)とも考へられ得るわけです。類例

Donu al mi folion da papero.

紙(物質名詞)を一枚下さい。

Skribisto simple transkribas paperojn.

——[L. L. Zamenhof]

書記は單に書類を寫す。

Zamenhof の譯舊約聖書出埃及記に次の二文あり:

La tabernaklon faru el dek tapiŝoj, el tordita bisino, el blua, purpura kaj ruĝa teksaĵoj. [Eliro XXVI, 1]

Kaj por la pordego de la korto estu kurteno, ...el blua, purpura kaj ruĝa teksaĵoj. [Eliro XXVII, 16]

即ち blua, purpura kaj ruĝa がありますが teksaĵoj を普通名詞と見れば複数、物質名詞と見れば單數で受けるわけです。

◎Kabe の Interrompita Kanto, p. 11, linio 9 de malsupre: Li reiru, de kie li venis! は (a)『あの方は何處からいらしたのか分らないが、とにかくもと来た道から御かへりになればよいのだ』と解釋してはいけませぬか、又 (b)『あの方のほうで何處かへ行つしやればよいのだ。どこからいらしたのだらう』と云ふ様に全く二つの文章に分けて解釋することは出来ませぬか (大阪佐々木氏)

〔答〕 Li reiru *lien*, de kie li venis 即ち『彼は元來た所へ歸るがよい』の意。(b)の如く解釋するのは無理でありませう。その意なら Li foriru (又は ien iru); de kie li venis? ◎Heroldo de Esperanto, Nro 31, La lando de Ŝekspiro の linio 5. „Ĉiu leganto nepre legis ion de li verkitan por traduko en sia nacia lingvo aŭ en Esperanto“ の por がどうしても分りかねます。per の preteraro でせうか。(同氏)

〔答〕 然り per の誤植です。『讀者諸君は皆必ずや何か彼の著作したものを自分の國又はエスペラント語の譯で讀まれたこととせう。』

七月の講演例會

七月第四水曜日(二十二日)學會の講演會は次の通り

場所: 神田區西今川町七日本エスペラント社講堂に於て、午後七時から

題未定 安黒オー郎氏

つゆのあけ

◎本號は記事幅濫のため『國際語有象』、無象『通信希望欄』、『雜誌紹介』等は皆休載の止むなきに至つた。

◎好評を博しつつあつた須々木氏 譯雨雀氏の『國境の夜』は本號を以て完結した。次號には磯崎巖氏、岡本好次氏の文學物が出ます。

◎八月號は夏季讀み物として肩のこらぬ特別號を出す豫定である。

◎須々木 aĉulego 堂々さ東都から渡米の途に上り aĉuletoj 連が横濱迄見送つたが、門司で諏訪丸からさび降りて東京に引きかへし今度は Empress of Asia 丸で米國に向つた。ロツキー 山下からはがきを寄こしたから今度はたしかに米國に入つたらしい。大に aĉulo ぶりを發揮して aĉuletoj をあつさ云はせた。(小坂生)

九州エス聯盟機關誌

„NOVA SENTO“

内容豊富、記事興味津々、
全文エス語、印刷、
體裁共に優美

——○●○——
執筆者 九大、藤澤、伊藤、大島、
諸教授

——○●○——
年六回發行、一部二十錢
(郵券代用可) 送料二錢

——發行所——
日本エスペラント學會福岡支部
神岡市極樂寺町三二、汀口方
振替福岡二〇〇四八

(綠 光 改 題)

エスペラント普及會發行

VERDA MONDO

(綠 世 界)

五月號 増大號(二四頁)

初學者中等科研究用

全部譯文註釋付

見本進呈

購讀料 半年三十錢郵税共
一年六十錢

(申 込 所) 天 聲 社

京都市綾部町

振替大阪六〇五三四

女子

エスペラント講習

(1) 静岡縣御殿場在藤岡村キリスト教女子青年會に於て。八月十七日から二十二日迄。講師高橋邦太郎氏。

(2) 東京市神田區錦町一のキリスト教女子青年會本部にて。七月第一土曜日から毎週土曜日午後一時より三時迄。講師森田松榮女史。

希望者は同女子青年會宛御申込み下さい。

(Daŭrigota de sur p. 131)

Jaro post jaro ni vane klarigadis la veran Esperantismon inter Esperantistoj, sed jam sufiĉe.

Tiuj kiuj ne povas, nek volas kompreni la internan ideon, kvazaŭ similas al la blinduloj, kiuj, ne sciante ke mankas al ili mem la vidkapablo, prenas la ordinaran homon por kriplulo.

Forpeli kunliginte en unu faskon tiujn, kiuj ne volas kompreni, kial kaj kiom grava estas la homaranismo por la tuta homaro, en la mezon de la Andoj, en Landon de Blinduloj.

La Esperantismo radikiĝas sendispute en lingva propagando, sed ne estas vera tiel longe, kiel ĝi ne celas al justeco kaj frateco inter ĉiuj gentoj kaj nacioj.

HEROLDO DE ESPERANTO

一週二回發行 一ヶ年 ¥7.00 御指定ノ號ヨリ本社直送
半ヶ年 ¥4.00

今回御便宜ヲ計リ一ヶ月間ダケノ豫約ニモ應ズル事ニナリ
マシタ。誌代送料共0.80デ、當所カラ確實ニ敏速ニ同送申
上マス、御申込ミノ際ハ誌代ヲ添エテ御望ミノ何月號分一
ヶ月ト御指定下サイ。
一部賣ハ送料共十二錢。月遅レハ送料共一部七錢。



總代理店

本郷區・東竹町・二十一

四方堂エスペ研究所

振替東京九五五六番

★新着案内御申込次第送呈★

★諸外國エスペ書藉雜誌輸入★

日本エスペラント社發行書籍目録

定價 送料

| | | | | |
|---|------------------|--|------|-----|
| 千布利雄著 | 獨習用 改訂
教科用 増補 | エスペラント全程 (厚クロース綴)..... | 1.50 | .06 |
| 既往八年間我國エス語教科書の權威として『エスペラント全
程』の價值は既に定評あり、然れども著者は之に満足せず、推
敲多年又自ら本書を用ひて教授したる經驗に鑑み、改むべきを
改め、増補すべきを増補し、茲に全く面目を一新して新に編纂
せしものなり、殊に隨意科『エスペラント韻律概要』の一章は
我國に於て全く新しき述作に係るなり。 | | | | |
| 千布利雄著 | 同上 | 練習課題解答集 (説明附) | .25 | .02 |
| 『練習課題解答集』は獨習者及び教師用として缺く可らざる
もの、從來是れ無きを遺憾させしが、今回特に別冊として發行
せり。 | | | | |
| 千布利雄著 | | エス語大文法第一輯、前置詞..... | .80 | .04 |
| 千布利雄著 | | 同上第二輯、副詞..... | .70 | .02 |
| 小坂狷二著 | | エスペラントの手引(小形本)..... | .05 | .02 |
| 小坂狷二著 | | エスペラント教科書(短期講習用書)..... | .25 | .02 |
| 小坂狷二著 | | 同上講義録..... | .25 | .02 |
| 小坂狷二著 | | エスペラント模範練習讀本(解説附)..... | .50 | .02 |
| 小坂狷二著 | | イソップ物語(詳註附)..... | .45 | .02 |
| 川原次吉郎著 | | レッシング物語(脚註附)..... | .25 | .02 |
| 小坂狷二著 | | エスペラント助辭一覽(小形本)..... | .10 | .02 |
| 小坂狷二著 | | 東洋白珠集 (PERLOJ EL LA ORIENTO) (和漢模範文譯)..... | .45 | .02 |
| 小坂狷二著 | | 論語 (LA VORTOJ DE KONFUCIO) (エスペラント譯)..... | .40 | .02 |
| 千布利雄著 | | 大成日エス辭典前編 (A—K)..... | 3.50 | .08 |
| 千布利雄著 | | 同上後編 (M—Z) (印刷中) | | |
| 中村博士, 黒坂博士,
千布利雄 共著 | | 大成エスペラント和譯辭典(薄クロース綴)... | 2.00 | .06 |
| 押田 共編
佐多 羅 | | エスペラント和譯解剖學名辭典 (薄クロース綴)... | 1.50 | .04 |
| 大場嘉藤編 | | エス日及日エス海員語辭典(薄クロース綴)..... | .60 | .02 |
| 淺井文學士, セリシエフ
川原法學士 共著 | | 實用エス和對照會話 | 1.40 | .04 |
| 由里忠勝著 | | 實用エスペラント會話..... | 2.00 | .06 |
| 千布利雄譯 | | SALOME | .45 | .02 |
| 小坂狷二著 | | 高等エスペラント教材(講習用)..... | .15 | .02 |
| 小坂狷二著 | | 同上講義..... | .15 | .02 |
| 小坂狷二著 | | 作詩法講義..... | .15 | .02 |
| 加茂其他諸氏著 | | 平和と戦争 (PAKO KAJ MILITO) (日本物語) | .15 | .02 |
| ESPERO | | 樂譜 | .05 | .02 |
| | | エスペラントの榮 (宣傳用) 百枚..... | .30 | .02 |
| 千布利雄著 | | ブーロニュー宣言 (エスペラントの主義) | .08 | .02 |

[切手代用拂込ハ一割増]

— 發 行 所 —

日本エスペラント社

京京市神田區西今川町 7.

電話大手 5588—振貯東京 51613.

◀ 洋書部: エスペラント洋書澤山あり (目録要二錢郎券) ▶

秋田雨雀・小坂狷二 共著

模範 エスペラント獨習

改訂第二十版

西洋の教科書の焼きなほしではない。語系を異にする日本人の爲めに全く新しい様式で講義されたものである。外國語の素養なき初學者も趣味のうちに習得が出来。既にエスペラントに熟達した人も他書に見出し得ぬ知識を求め得られる。〔布装三八〇頁。定價二圓。書留送料十九錢。〕

ブリヴァ著・松崎克己譯

愛の人ザメンホフ

他の萬國語が盡く失敗せの中にエスペラントのみひこり今日の隆盛あるは何故ぞ。それは此の語が優秀であるのと幾多熱心の士が崇高なるエスペラント主義、即ち人類主義に感激し、身をすて、普及に努力し、努力しつゝあるからである。人類主義の教科書たる本書二〇〇頁を讀むはエスペラント學習者の義務である。〔定價金一圓。書留送料十三錢。〕

振替口座東京
四二八八番

叢文閣

東京市牛込區
神樂町二丁目

★ カニヤ書店發行圖書目錄 ★

- | | 定價 | 送料 |
|---------------------------------------|----------|-----|
| (新刊) ザメンホフ演説集 | 円.70 | .04 |
| モノタイプ精版印刷鮮明、講習用教材として最適 | | |
| (新刊) 八木日出雄述 我國に於ける 外國語問題とエスペラント ... | .60 | .04 |
| エスペラントを普及せらるゝ人々並に國語及外國語問題に志ある諸氏の一讀を俟つ | | |
| (三版) 三高エス會編纂 日本語エスペラント小辭典 | クロス 1.00 | .04 |
| | 總皮 1.50 | .04 |
| 研究會話文通に於ける好指針 | | |
| (八版) 八木日出雄述 エスペラント講習讀本 | .35 | .04 |
| 短期講習會用として歡迎せらる | | |
| (初版) 鳥居篤次郎著 盲人用點字 エス和大辭典 | 7.00 | .30 |
| (四版) 鳥居篤次郎點譯 盲人用點字 エスペラント講本 | .65 | .12 |
| 盲人のエスペラント入門書として盲界に使用さる | | |

發行所 ヤニカ書店 京都市寺町夷川上ル 電上 2555 振替大阪 23404

大正十四年七月一日發行(毎月一回日發行)

DAIDOŠA

UNUAKLASAJ PRESISTOJ EN

Esperanto, angla, franca,
germana, rusa, itala, hispana
kaj ceteraj lingvoj
de la tuta mondo
Speciala arto en muziknotoj

{LIBROBINDO}



大道社

東京市麹町區車町七番地

電話

振替口座

四谷六二一二番

東京五一五七二番

誌雜刊月



◎國字問題解決の先驅◎

錢十二部一價定
圓貳金前年一

◎日本の國字となるべき名譽を運命をもつた日本式綴方に
標準的綴方としての日本式ローマ字を應用し實際化したロ
ーマ字の雑誌を御覽なさい!!
◎ローマ字の綴方、要點等に就ては郵券二錢を
御送り下されば「ローマ字のすすめ」といふ小冊子を差上げ
ます。

財團法人 日本ローマ字社
東京市本郷區駒込曙町十一番地
振替東京二一五〇四・電話小石川七〇一

本誌廣告料

| | 全頁 | 半頁 | 四半頁 |
|-----|-----|-----|-----|
| 一回 | 25 | 13 | 7圓 |
| 三回 | 72 | 37 | 19〃 |
| 六回 | 140 | 74 | 38〃 |
| 十二回 | 250 | 130 | 70〃 |

回数による割引は同文のもの連載の場合に限る。

維持會員の廣告は一割引; エスペラントに關するもの二割引; 金錢に關係なき廣告四割引。料金はすべて前金のこと。半頁以上の廣告主には雑誌を無料呈す。

廣告を周旋して下さつた方には廣告料の二割を謝禮す(割引の廣告料は此の限りにあらず)。

本誌購讀料

一部 郵税共 二十二錢
半年分 前金 一圓四十錢
一年分 同 二圓六十錢
(學會々員に限り二圓四十錢)

本會振替口座

一般會計用 {東京 11325 番
長野 3283 番
基本金專用 東京 32089 番

大正十四年六月二十日印刷

大正十四年七月一日發行

發行所 日本エスペラント學會
東京市牛込區新小川町三の十四

編輯兼者 小坂 獺 二
刷所 (大道社) 岸山芳太郎
東京市麹町區車町七番地